

シンポジウムのあとに

—— 同僚の鶴田清司さんに向けて

田 中 実

埼玉大学教育学部でのシンポジウム「文学と教育をめぐって」が行われたのは二〇〇六年十二月二日、もうあれから一年以上たちました。初校で大幅に手を入れさせてもらって、再校を私が受け取ったのが二〇〇七年の十二月十八日、既にそのとき、鶴田さんの「文学的価値と教育的価値の視点から『国民的教材』を問い直す」の文章が添えられていました。ですから、私のこの文章はいわば「後出しじゃんけん」でしかないことを先にお断りしておきます。それからシンポジウムの当日の発言にも大きく手を入れさせて貰っていることをお断りします。

鶴田さんとは大学で長く同僚でありながら、なかなか話し合える機会がなく、恐らくこのままではこれが最後になると思われるので、ここでは腹藏なく率直に語ることで、埼玉大学教育学部山本良先生、戸田功先生に感謝の意を表すとともに、この機会を最大限に生かし、明日の国語教育を拓くには今回、公開の書簡の形式がよいと考えました。それが司会の紹介の言葉、

「言語技術教育の論客として非常に高い評価を受けている」、まさしく私もそう思っています。そればかりでなく、私にとつては大学の同僚としてまた教育学の真摯な専門家としても常に仰ぎ見ている鶴田さんへの礼節と考え、明日の国語教育、文学研究へと向き合って行きたいと考えています。

先に申し上げておきますが、私個人は、文学研究の学会においても、文学教育の研究においても「第二のパラダイム転換」と大げさな言い方をして、「読むこと」を「読みのアナキズム」であるテクスト理論の原理から大改変し、文学作品の力を教育や文化に生かす必要があると妄信している者であります。『日本文学』の二〇〇七年六月号「わが日本文学協会のゆくえ―再び『八〇年代問題』を今超える―」外、「第三項」を容認しない研究者を名指しにし、学会批判を書き続けます。ごく最近「断想Ⅳ ―第三項という根拠」（『日本文学』二〇〇八・三）では広島大学の山元隆春さんや文芸批評家の井

口時男さんの「読み方」を批判したのですが、ここでもその立場にあることを申し上げておきます。そこで鶴田さんのご本、『なぜ日本人は「ごんぎつね」に惹かれるのか』(二〇〇五・一一 明拓出版)の問題ですが、私がこれをその年一番の推薦する本に挙げながら、なぜこの啓蒙書が入口であって中身に不満がある会場で申し上げたかと言えば、まず鶴田さんの『ごんぎつね』の「読み方」に私が納得ができないだけでなく、「解釈と分析」という方法がはつきりしないと考えているからであります。

シンポジウムの会場でもお話ししましたが、例えば「対極的な読み方」として鶴田さんが取り上げられた二つの感想文、A子さんの「最後、ごんは分かってもらえたという気持ちを持ったであろう。」と、B子さんの「兵十はごんがひとりぼっちということすら知らないんじゃないか」との読みについて、私から見ると両者は対立しているというより、どちらも鋭く作品に突き刺さって有機的構造的に繋がっています。ただし、A子さんの読みの射程は驚異的、異様に深く、この童話から「話者の誕生」までの経緯を構造的に読み込んでいます。ごんは兵十に過失ではなく殺されたのですから、ごんと兵十の間には鋭い断絶があることは前提で、これを超えようとしているのです。兵十は栗や松茸を持ってきてくれていたのが神様ではなく、ごんだと知ること、何故自分がごんを殺してしまったかを考えざるを得ないでしょう。するとひとつひとつ思い当たるはずです。何故、ごんは森を抜け出し、危険を承知で自分の家の中まで入り込んで、栗や松茸を丁寧置いていってくれたのか、そのわ

けを。魚が先にあったことも。すると、ごんが母を亡くした寂しき、一人ぼっちの悲しみからいたずらをしていたことがわかるはず。ですから、ごんが主人公となった話が残ったのです。つまり、殺されたごんの内面の声はもとと兵十によって想定されたもの、兵十とごんとは分身だったからこそ、これが他の村人に伝わり、茂平から「わたし」が聞いて、作品内の聴き手に向けて語られることになったのです。A子さん自身はどう自分の読みを意識しているかはともかく、B子さんのごく通常の断絶と捉える読みを包み込んで、この童話の構造を読み解いていっていると私は評価します。佐藤学さんの読みはB子さんのプロットに閉じられた読みではなく、メタプロットに向けられています。文学研究者の読み方がこうした射程を取り逃がしてきたのが『ごんぎつね』の受容史、あるいは研究史だったと私には思われます。私個人の捉え方は、確か二〇〇四年の北海道札幌の「研究集団ことのは」でもお話し、それは鶴田さんの今回のご本でも紹介され、その後、拙稿「これからの文学教育」はいかにして可能か―『白いぼうし』・『ごんぎつね』・『おにたのぼうし』の〈読み方〉の問題―(『これからの文学教育』のゆくえ)二〇〇五・七 右文書院)でも詳しく述べました。ところが鶴田さんはその拙稿も踏まえた上で、本年度『日本文学』二〇〇七年一月号、「児童文学が教科書教材に変わるということ―『ごんぎつね』はなぜ国民的教材になったのか―」で、宇都宮大学の近代文学研究者鈴木啓子氏と田中との論争を引用しながら、次のように言われています。

両者のやりとりを通して、「ごんぎつね」は読者によって「物

語」としても読めるし「小説」としても読めるという両義的な作品ではないかと筆者には思えてきた。鈴木自身も「テクストのどこを前景化するかによって、読みはどちらにも傾きうる」と述べている。(中略)こうした事例から、「ごんぎつね」は「物語」か「小説」かという二元論的な発想を超えて、両方の要素を内在させていると理解すべきだろう。そして、これこそが「ごんぎつね」の最大の文学的価値ではないだろうか。

今でもこうお考えでしょうか。ここで言われている「二元的な発想を超えて」など私から見ればあり得ず、これでは近代文学研究者同様、基本的な「小説」理解に欠けていると言わざるを得ません。『話』のない小説は例外で、もともと近代小説は伝統的な「物語文学」を内包していて、これに西欧の超越的神概念が交差して成立したと私は考えています。そこでもう少し「小説」と「物語」の説明をしておきます。(これは本来近代文学研究者に向けて先にしておくべきことですが)。

鈴木啓子さんの言う「テクストのどこを前景化するか」によって大きく変わるのは「読み」のこと、解釈の範囲です。その作品内容の解釈を超えて、「小説」と「物語」の原理は構造上異なっています。常に言っていることですが、「物語」の文学とは語り手によって語られているお話世界の表現ですが、「小説」はその「物語」のメタレベルにあつて「物語」を内包し、これを通して世界を新しく捉える装置、「物語+語り手の自己表出」であると我流に定義しています。パターンに収まる「物語」の中の語り手ではなく、そのメタレベルの語り手は登場人物Aを

全的に語るとBは語れない、人間というのは相手から語れないというのが、私が捉える〈語り〉の原則であり、〈語り〉を捉えるのは読みの技術ではなく、原理に関することです。つまり、語る主体は語られる側から語ることは断じてできないのです。そこに了解不能の《他者》の問題が浮上し、ここに小説の領域、三人称客観描写の難問があります。こうした小説の根源的秘密はここではこれ以上触れませんが、『日本文学』の拙稿「断想」シリーズ(二〇〇一・三、二〇〇三・一、二〇〇六・八)及び最近の『これからの文学教育』のゆくえ』及び『これからの文学研究と思想の地平』(二〇〇七・七 右文書院)をご覧いただければと思います。

そこで『ごんぎつね』に戻ります。繰り返しますが、ごんは兵十に殺されるのですから両者の間には鋭い断絶と他者性があるかのようです。しかし、実はどちらも母を求めて生きており、ごんの気持ちはその後曇りなく兵十に理解され、包み込まれることで、ごんの物語が伝承され、その上で、この童話表現が成立しているのです。そこには一切の他者性は見せかけ、母恋いの物語が哀しくいじらしいお話として完結しています。これが私が定義する「小説童話」ではなく「物語童話」である所以です。

児童文学では「物語童話」と「小説童話」を分ける必要があります。その核心を理解して頂く必要を常々機会あるごとに言っています。泉鏡花を専門にする近代文学研究者の鈴木啓子さんは私にとつて畏怖する盟友ではありますが、鏡花を「近代の物語」文学とするか、「近代の小説」とするかの一点において、立場

を異にしているのかもしれませんが。と言うより、思うに、鏡花文学だけではなく、述べましたように、現在の近代文学研究の学会が「小説」を「小説」たらしめる生命線である《他者》を自覚していないというのが私の主張なのです。国語教育研究の分野が問われているのではなく、近代文学研究のあり方が問われていると私は考えています。

次に鶴田さんに言いたいことは、戸田さんが鶴田さんに向かって、「鶴田さんは文学に出会っていないのではないか」という、一見鶴田批判あるいは侮辱とも取れる発言に関してです。

私が思うに、これは逆、戸田さんは国語教育研究者として鶴田さんを評価しようとしたのであり、そこを誤解されたために話が中断してしまったと思われる。戸田さんは、鶴田さんを文学に出会えなかった者として位置付け得るからこそ、如何にして子どもたちが文学に出会うかの方策が立てられると言おうとしているのであり、そこにあるべき文学教育、鶴田流の言語技術教育の存在価値があるはず、こう鶴田さんの研究を評価、位置付けようとしたと私には思われます。私の方は自分が文学に出会っているところから始めているに過ぎないため、教え方の指導がそもそも開かれたい、こう戸田さんは言おうとしたのだと私は理解します。その意味で私は戸田さんの鶴田評価を支持します。以下はそう捉えた上で、私は鶴田さんの研究の基本をお伺いします。

鶴田さんの「分析」はコンテキストを対象にしているのか、それともその切断による記号を対象にしているのか、です。私は蓮實重彦が七〇年代以降展開してきた「表層批評」の記号論

に対して第二のパラダイム転換による「深層批評」の立場にいます。鶴田さんの「分析」の対象はコンテキストなのか記号なのかが峻別されないで読みが展開されているように私には見えます。国語教育で「分析批評」といえば、アメリカのニュークリティシズムのことですが、これは「言語論的転回」を踏まえない実体主義、因みに今、全国大学国語教育学会の会長望月善次さんはこの立場です。「言語論的転回」以前にいて、研究の後退したところにいます。蓮實重彦のそれは客体の文章を切片化し、読みの「還元不可能な複数性」の中で捉えるので、それ自体を学問としても認めますし、その批評に畏怖していますが、しかしこれでは文学抹殺に繋がり、その跡を追うことは私にはできません。鶴田さんの場合、「還元不可能な複数性」なのか「容認可能な複数性」の中で捉えるのか、この選択がなされずに「解釈と分析」が展開されていると私には思われます。

最後にもう一つ、これからの国語教育の問題は、鶴田さんも取り上げられている教科書問題にあると私は考えています。今回の文章を読む限り、「教科書会社の自主規制」に沿う形で議論が展開されています。『オツベルと象』の戦いの場面と『土神と狐』の惨殺の場面との違いは相対的なものでしかなく、現在の教科書読者によつては『土神と狐』を許容することがむしろ肝要で、そのためには惨殺する必然性を読みとる国語教育研究者の共通認識が要請されていると考えます。鶴田さんのように『ごんぎつね』のA子さんの感想文を「毒の要素を薄めようとした結果」と理解するのは逆、前述したように、これを立体化し構造的なところで捉えてあげる読みを必要としていると考

えます。文学の「毒」を「薬」にするのは「読み方」の制度と文化にかかっている、国語教育の研究の一つは、このことと対峙すべきと私には思われます。

今、私は山梨県教育委員会の要請を受けて、県下の高校の国語の授業を見ていますが、そこで出たことの一つは、やはり「国語教科書問題」です。例えば教材として『こころ』の一部を本文とし、前後の箇所をあらすじにして、『こころ』全体を考えさせるような教科書の作り方に関して、ある若い先生から無謀という意見が出ましたが、まったくその通り、こうしたことは異議申し立てをすべきだと考えています。これは他の雑誌『月刊国語教育』二〇〇八・三にも、また山梨県教育委員会の報告書にも書きましたが、本文に則して根拠を探りながら読むことが読み手の内なる世界を露わにする、こうしたことが「学力向上」に必須である、こんなことを専門家の鶴田さんとも議論しあえたらと願っています。言語技術教育という分野の中の賢治童話の『やまなし』、『注文の多い料理店』『オツベルと象』などは教科書教材として高い評価を得ていますが、『土神と狐』や『フランドン農学校の豚』などが教科書に採用されない件はどう考えたらよいか、教科書会社の自主規制をどう考えるかの問題です。文学の「毒」が教材にいつそう深く必要な状況が今は来ていて、その際「薬」を同時に作用させる「読み方」が来ていると私個人は考えています。

鶴田さんのような教育学の専門家に門外の文学研究者が「めくら蛇におじず」で勝手なことを申し上げているかと恐れています。その際、明日の文学教育をなんとか真摯に夢想しようと

している者のたわごととしてお許し下さい。